死ぬるは浮世のきまりなり
死なんは浄土のきまりなり
これが楽しみナムアミダブツ
妙好人 浅原才市翁

# ひかり

No. 68
2006年（平成18年）
3月1日
発　行
浄土真宗本願寺派
和歌山教区日高組
責任者
鈴木悟峰

日高組門信徒会研修会（於 即生寺）

## 阿弥陀経に聞く

### ―十大弟子　阿難陀Ⅱ―

おシャカ様は沙羅双樹の下で亡くなろうとされていました。その傍らで阿難陀は悲しみにたえきれず泣きました。阿難陀は「私はまだ修行中で悟りを開いていません。それなのにおシャカ様は亡くなろうとされています」と。

その様子を知ったおシャカ様は、「悲しんではいけません。愛するもの・親しいものは必ず別れなくてはいけません。生あるものは必ず滅する。汝は功徳を積んできた。努力せよ。そうすれば必ず聖者になれる」と。また「阿難陀よ。先生の言葉は終わった。先生はいないと思っているだろう。そのように思ってはいけない。私に説いた教え・法を拠り所としなさい。自らを拠り所とせよ。」と。

阿難陀は、おシャカ様に長く仕えたが、阿羅漢と呼ばれる聖者になっていなかった。聖者は喜びも悲しみも超越した存在ですが、阿難陀は聖者でなかったから、悲しみを越えることはできなかったのです。おシャカ様の涅槃図で多くの比丘や神々や獣の中で泣いている比丘を見つけたら、それが阿難陀です。

入滅されてから、王舎城の郊外で大迦葉を中心に、五百人の阿羅漢がおシャカ様の言葉を経典として編集する会議をもちました。経典をまとめる責任者を誰にするかで、もめました。最も多くおシャカ様の言葉を聞いている阿難陀こそ適しているのですが、まだ悟りを開いていません。阿難陀は、責任を強く感じて、その前夜に心を集中して悟りを開きました。

翌朝、心晴れ晴れとした阿難陀は、おシャカ様の言葉を「如是我聞・私はこのように聞きました」と人々に伝え、百二十歳まで生きました。

（永原智行）

# 法話

「人身受け難し、今已に受く佛法聞き難し、今已に聞く此身今生に向って度せずんば、さらにいずれの生に向ってか此身を度せん、大衆諸共に至心に三實に帰依したてまつるべし。自ら佛に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに大道を體解して無上意を発さん身ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに深く経蔵に入りて智慧海の如くならん。自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに大衆を統理して一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも遇値うこと難し、我今見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。」等、浄土真宗は聞く宗教であると聞いたことがあります。しかし、仏教の言葉には、大変理解しにくい言葉があるのでよく聞きちがいをすることがあると思います。一度聞くということについて考えてみたいと思います。時に縁あってお葬式に参ります。葬儀当日、いよいよお棺の出るとき、お茶碗を割ることがありますが、故人が使用していたお茶碗です。この風習は、亡き方、死者との縁を断ち切る決別の儀式だといわれています。つまり、あなたが帰ってきても、もう食べる茶碗はないんですよ、という意味で行われているそうです。亡き方に対して、できるなら生き返ってほしい、元気な声と姿を聞かせてほしい見せてほしいという人の情を断ち切り、亡き方をむこうへ追いやるという行為は亡き方に対して、おもいやる心もなければ、しのぶ心もない行為です。死をおそれることなく、自分のいのちを見つめなおし、亡き方とともに生きる道を、親鸞さまから教えていただきました。「前に生れたものは後を導き、後に生まれん人は前を訪へ、連続無窮にして願はくは、休止せざらしめんと欲す」という。『安楽集』のお言葉を、改めてかみしめ決別の儀式など必要のない念仏者の生き方を聞く必要があると思います。そしていよいよ、出棺です。火葬場へ向って出発しました。道中すこし遠いので隊列を組み歩いて行きました。火葬場につくと遺体を台の上に置き、棺のまわりを念仏をとなえ回るのだそうです。後に理由を聞くと、死者がこの世に帰ってこないようにとのことです。そして棺の中へ花など入れるのは普通ですが、五円玉を六個入れるのです。それは、サンズの川の渡し賃だそうです。真宗以外の地方の人々の集まりですから、他宗の習慣が見られるのです。私も聞いた話ですが「サンズを渡るのには、「六モンセン必要」と。ただし、その漢字は「三途を渡るには六門専が必要」となっています。これも聞きちがいからです。三途とは、私どもの悪によって作っている地獄、餓鬼、畜生のことで、三悪道ともいいます。六門専とは、六つの仏道の門を一生けんめいに修行するということで、数息門、随息門、止門、観門、還門、浄門の六つ、もしくは、彼岸会のときによく聞く言葉ですが、六波羅密とよく聞きます。六波羅密とは迷いの此岸から悟りの彼岸へ渡るための実践法です。六つの仏道実践に心がけるのです。それは、1布施（他にほどこす）2持戒（おきてを守る）3忍辱（たえ忍ぶ）4精進（休まず努力する）5禅定（心を静める）6智慧（真実に生きる）の六つです。つまり不幸な今をのり越えて、本当に幸福な向こう岸に渡るためには、六つの実践修行が必要というわけです。ところが、俗世間の考えで聞いた人々は「六門専」を、「なるほど」渡し賃が六文だな」と受けとったわけです。六門専と六文銭とでは、だいぶん違ってきます。私たちが仏教を聞くばあい、このようなちがいに注意することが必要と実感しました。

（上西）

## 法悦クイズ

下の1～3の○内にあてはまる漢字を組み合わせて、親鸞聖人が著された『正像末和讃』の結讃に曲を付け、私たちに親しみやすく、口ずさみやすくされた「如来大悲の……」で始まる讃歌の名称を答えてください。

| 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|
| ○ | 報 | 聖 |
| 仏 | ○ | ○ |
| 偈 | 講 | 太 |
| | | 子 |

官製ハガキにクイズの答え、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、所属寺、御感想、御意見等を明記の上、
〒649-1221
日高郡日高町志賀3851
善宗寺内　組長事務所
までお送りください。
※抽選で10名の方に粗品を差し上げます。
※締め切り日
平成18年5月31日
※発表は次号

67号の正解は、『御絵伝』でした。正解者の中から、次の方に粗品を進呈いたします。

円明寺　小林　照代　様
信行寺　塩田　廣一　様
覚性寺　尾崎　輝喜　様
覚性寺　尾崎ゆり子　様
覚性寺　坂口　武子　様
覚性寺　村上　良子　様
光台寺　深海佳代子　様
円行寺　濱口　平　様
円行寺　濱口　繭美　様
妙願寺　宇恵　節子　様

仏典童話

# 草の葉っぱとくびかざり

大きな岩かげは、ちょうど修行をするのに、おあつらえむきの場所でした。

修行者は、そこにいつも、じっと座っていました。

そのちかくに村があって、一人の男が住んでいました。

男は、その修行者を敬い、食べ物を運び、水をささげ、いつもていねいに世話をしていました。

そんなある日のことです。

男は、修行者のところへ、百個の黄金のくびかざりを持って、やってきました。

そして、言いました。

「行者さま、この黄金のくびかざりは、お金にするとたいへんな額になります。わたくしにとりましても、大切な財産でございます。今まで、家の中にかくしておりましたが、だれかにとられるかもしれないと考えますと、夜もおちおちとねむってはおれません。行者さまは、大変りっぱなお方ですので、よもや泥棒もここへは、やってきますまい。行者さまに番をしていただくなら、わたくしも安心でございます。どうぞ、この黄金のくびかざりを、行者さまがお座りになっているすぐそばの岩の下へ、うめさせてください。」

修行者は、うなずいて言いました。

「いいとも、岩の下にうめたのを知っているのは、わたしだけだ。このわたしは、修行をする身だから、他人のものに対しては欲な心をおこすことはない。安心しているがいい。」

男は、なんども頭をさげて、村へもどっていきました。そのうしろすがたをながめながら、修行者は、にやりとわらいました。

**―いよいよ、にせの修行者をやめるときがきたようだ。あれだけの黄金のくびかざりがあれば、これからは、なんの苦労もなしに生きてゆける……。**

それから、なん日かたったある日、修行者は、黄金のくびかざりをこっそりとほりおこすと、山のうらがわの岩かげに、かくしなおしました。そして、いつものように食べ物を持ってきた男に言いました。

「長いあいだお世話になって、ほんとうにありがとう。しかし、今日かぎり、わたしはここを去って、べつの修行の地をさがそうと思う。あまり長く一つのところにいると、修行がすすまないのだ。お世話になりながらこんなことを言うのは大変心苦しいかぎりだが、どうかわかっておくれ。」

男は、とどまっていただくように、何度もたのみましたが、修行者は、かたくなにことわりつづけました。

とうとう、男もあきらめ、修行者に言いました。

「それほどまでにおっしゃるのなら、もうお引きとめはいたしません。長い間ほんとうにありがとうございました。行者さまは、わたくしの心のささえでございましたのに、ざんねんでございます。」

男は、修行者がしばいをしているとはつゆしらず、なごりおしげに、村のはずれまで見おくりました。

「ありがとう……。」

修行者はそう言って、

「……もうかえっておくれ。そうでないとわたしは、ここから足がまえにすすまない。」

と言いだしました。

男は、きびすをかえしました。

ふりかえりふりかえり去っていく、男のすがたが見えなくなったとたん、修行者は、ものすごいいきおいで、べつの道を走りだしました。

修行者は、風のように走って、黄金のくびかざりをかくしたところへ、もどってきました。そして、あわててそれをほりだし、持っていた袋につめました。

ちょうどそのとき、そこから少しはなれた道を、一人の商人が歩いていました。

商人は、岩かげで土をほりおこしている修行者のすがたを、なんの気なしに見つめていました。

商人は山をぐるっと回って、修行者がもといた岩かげまでやってきました。するとそこでは男が天をあおいで、ぼうぜんと立ちつくしているではありませんか。

「どうしたのです。」

商人はたずねました。

「ここへうめておいた、黄金のくびかざりがなくなったのです。」

「あなたが、うめておいたのですか。」

「そうです。修行者がいらしたときは、泥棒も近寄れなかったのに、いらっしゃらなくなったとたん、このありさまです。泥棒はねらっていたのです。それにまちがいありません。」

男はおいおいと泣きだしました。

と、そこへさっきわかれたはずの修行者が大きな袋をせおって、もどってきました。

「なにを、泣いているのだ。」

修行者は男に言いました。

男は気がついて、修行者の手にしがみつきました。

「もどってきてくださったのですか。」

「ああ、大変なことに気がついてもどってきたのだ。ちょっと頭のところを見ておくれ。草の葉がついているだろう。この草の葉は、ここを離れるとき、岩かげに生えていたものがくっついたにちがいない。たとえ草の葉といえども、ここにあったものを持っていくなんてことは、とてもわたしにはできないことだ。だから返しにきたのだ。」

「行者さま、行者さまに守っていただいておりました黄金のくびかざりが、ぜんぶぬすまれてしまいました。」

「ほんとうか。」

「ほんとうでございます。」

「わるいやつがいるものだ。わたしのように、草の葉っぱでさえ返そうとする、正直者もいるというのに…。」

それを聞いていた商人が、とつぜん大きな声で言いました。

「あ、思い出した。さっき、このうら山の岩かげで土をほっていたのは、あなただったのか。とおくて顔までわからなかったが、たしかにあなただ。あなたは、土からほりだしたものを袋につめていた。それが、お日さまの光で、きらきら輝いていた……。」

男は、

「草の葉っぱでさえ返しにこられた行者さまが、泥棒のはずはない。」

と言いはりました。

しかし、修行者の袋から、黄金のくびかざりが出てきたときには、男は目をうたがいました。そして、じっと顔をふせている修行者をみつめながら、つぶやきました。

**―どうして、行者さまは、草の葉っぱを返しにもどってこられたのだろう。もどってこなくともよかったのに……。どうしてもわからない。どうしても、わからない。**

ほとけさまのまなざし・飛びつづける旅人（本願寺出版社）より

## よろこび家族

**家族構成**

大江　佐和治
　　文代子
　　幸亮
　　泉穂花音
　　海恋

息子、亮(29)が初参式を頂いた際の言葉の一節に『両親が両手を合わす人間であってこそ、子供達も両手を合わす人間に成長するでしょう。両親が夕暮れのひとときに、お仏壇に向って静かにうなずく姿こそ、子供達の脳裏にしっかりと刻みつけられることでありましょう』と、ありました。この気持ちを私達夫婦同様に、息子夫婦そして孫達へと受け継いでもらいたいです。やんちゃ盛り、元気に飛び廻る孫の恋音(2)は、平成十五年七月に初参式を頂きました。

今は、その息子夫婦、二人の孫達に囲まれ、母も交えて四世代、毎日にぎやかに楽しく暮らしています。

## 門徒心得

### 蓮如上人の『御文章』

蓮如上人の著作で最も名高いのは、『御文章』と呼ばれるお手紙です。手紙といってもただの手紙ではありません。親鸞聖人によってあらわされた難しい教義を、当時の誰にでも、文字の読み書きの出来ないような人にでも理解出来るような、平易な言葉でしたためられたものです。手紙ですから最後は、「あなかしこ・あなかしこ」という言葉でしめくくってあります。お寺での法座の後、また、お家での法事、お勤めの後など、『御文章』が読みあげられます。

「あれは、いままでさまざまにむずかしい言葉で仏さまの教えを述べてきましたが、要するに分かりやすく言うとこういうことなのです。」という意味なのです。蓮如上人の没後、そうした手紙から全部で八十通が選ばれ、五冊の本にまとめられました。それを『五帖八十通の御文章』といいます。第一冊から第四冊までは年代順、第五冊には日付を記していない手紙が収められています。みなさんのご家庭の御文章には、八十通まとめて一冊にしたものか、その中から主なものを抜粋したもののどちらかが納まっているはずです。かけがえのない宝物ですが、熟読して初めて値打ちの出る宝物です。

お仏壇の飾り物で終わらせないように、常に、お仏壇の前に置いておきましょう。

## お仏壇のQ&A

**Q お仏壇の前に置いている黒い箱は何でしょうか？法事でご院主さんが読んでいましたが…。**

**A** 「御文章」といいます。御文章は、本願寺第八代宗主・蓮如上人（一四一五～一四九九）が「南無阿弥陀仏」のみ教えをご門徒に分かり易く書き表されたお手紙のことです。

現在、『御文章』として広く知られるものは、五帖（じょう）八十通（つう）から成っていて、「御文章」を年代順に配列しますと、百五十八通ほどになります。その上に年月の記されていないもの、類似の文、消息文などを加えますと、三百十三通にもなるといわれています。

浄土真宗のみ教えが今日のように全国に広がり伝わっていったのは、蓮如上人の布教伝道、すなわちこの「御文章」によるところが大きいのです。

蓮如上人は、ご本尊を「南無阿弥陀仏」に、朝夕のお勤めを「正信念仏偈・和讃」にそれぞれ統一され、ご本尊、お勤め共に今日に至っています。

ご門徒と共に「正信偈・和讃」をお勤めすることによって、ご門徒の日常生活の中にまで南無阿弥陀仏のこころを浸透させようとされたのでしょう。

さらに、一通一通の「御文章」を通して、この南無阿弥陀仏一つで、凡夫のこの身のままで仏にさせていただくただ一つの道であることを、ご門徒に訴えていかれたといえます。

朝夕のお勤めの際には、是非ともお正信偈さんと御文章を拝読いたしましょう。

## 日高組通信

**【寺族婦人会】**
三月六日(月)午前十時から衣奈・信行寺にて寺族婦人会報恩講、総会を予定。

**【念仏奉仕団】**
三月九日(木)～十日(金)に京都・本願寺にて念仏奉仕団活動を行う。総代会は白崎地区、仏教婦人会は由良地区が担当する。

**【日高組基幹運動推進委員会】**
三月十一日(土)午後二時から柏・善宗寺にて開催予定。十七年度基推事業報告、十八年度事業計画等について協議する。

**【平成十八年度日高組定期組会】**
三月二十五日(土)午後二時から小浦円行寺にて開催予定。住職・寺族・門徒総代物故者追悼法要及び法話の後、平成十七年度日高組事業経過報告、決算報告、会計監査報告、十八年度事業計画、予算について審議する。

**◎お知らせ**
阿戸・教専寺本堂修復落慶法要他、慶讃法要が四月三十日(日)午後一時半から厳修されますのでお誘い合わせご参拝下さい。